

西那須野マロニー工訪問看護ステーション

那須塩原市井口533-1-1

施設アピール

お一人おひとりに合った生活の、再構築を目指します。

同敷地内に、国際医療福祉大学病院、老人保健施設、特別養護老人ホームがあり、医療・福祉共に充実しています。

訪問看護は、ご利用者の心身状況に合わせて、医師の指示のもと、ご自宅に伺い健康状態の観察と助言、介護相談、創部処置、医療処置、終末期の看護を行います。訪問リハビリは、自立支援で、自立のための支援を行います

施設の役割や特徴

併設の国際医療福祉大学病院からの依頼が多く、小児と難病（特に神経難病）看取りの患者さんが多いのも特徴がもしれません。

その結果、医療保険が7割を占めています。できれば介護保険利用の割合を、増やしていきたいと考えてはいます。これは、今後の課題ですね。

また、往診できる医師が少ないことから、病院へ入院するケースもありますが、患者様の生き方や考え方を傾聴しながら、その人らしく在宅生活を送れることを第一に考え支援しています。

訪問リハビリスタッフも、多数常駐しており、入院から早い段階で、継続してリハビリの介入ができていることから、在宅に戻ってもADLの低下予防につながっています。

居宅介護支援事業所も併設しており、主治医を含めて情報の共有も密にとれており、利用者様、そのご家族に負担をかけないことを心掛けています。

連携している主な医療機関

国際医療福祉大学病院
近隣の開業医

国際医療福祉大学クリニック
（サテライト設置により）

ケアマネジャーとの連携でちよっと気になったこと

利用者様の状態に応じて、ケアマネジャーに追加利用の必要性を相談しても、その理解を得られないことが稀にあります。

逆に、訪問看護（特にリハビリ）の必要性がないこともあります。そのためにも、担当者会議で今後の予測等も含めて伝えるように心がけています。

ケアマネジャーに期待すること

お互いに訪問が多いので、連絡を取り合うのが夕方に集中しがちです。事業所の都合により、個人の携帯で「どこでも連絡帳」を活用するのも難しい状況です。

コロナ感染予防の支援金で、インターネット端末を入れようかと考えましたが、当方では容易です

利用保険割合
医療保険：7割
介護保険：3割

管理者
小堀千絵様



陽だまりのような、ホットな時間を過ごさせていただきました。



が、患者さん個人としては、難しいかと思われれます。連絡の取りやすいツールがあるといいですね。医療と介護の連携が、今後、増々重要になってくると思います。ケアマネジャーさんは、訪問看護をどう評価しているのか、気になることです。医療依存度が高くなければ相談できないし、敷居が高いと思われがちですが、どんなことでもお声掛けください。共通して言えることですが、事業所内でコロナが発生した場合、代替えできないことが、今後の課題ですが、連携を取り合う中で、お互いの関係を深めていけると良いと思います。

顔が見える関係づくり
とにかく
お互いに
コミュニケーションを
密にとることが
大切ではないでしょうか

豆記者の思い



事務室内の様子 勤務スケジュールがぎっしり



リハビリ専門のデイケアルーム

関わった事例で心に残ったこと

70歳代のK様とは、病院の退院カンファレンスで、最初の出会いでした。

歩行困難など症状が出現してから、様々な診療科を受診され、最終的に神経難病であるALSと診断されました。徐々に嚥下機能が低下し、呼吸機能低下も出現し、在宅療養となり訪問看護の提供が開始になりました。

「胃腸栄養、補助呼吸までは希望するが、気管切開・人工呼吸は希望しない」と、意思表示をされていました。

K様は、「自分らしく残された時間を過ごしたい。できることは自分でやりたい」と、ギリギリまで歩行されていました。

呼吸困難が出現し、体調がつかなくなった時まで、ご自分で活動されていました。

信仰される曹洞宗の教えを説かれ、自然のまま、ありのままを受け入れていく生き方を、教えて下さいました。

私たち訪問看護、リハビリ職員は、K様の気持ちを汲み、意思決定の場面で、常にメリット・デメリットをきちんと説明し、家族の思いや介護負担などもお伝えしながら、最終的にK様に決定していただきました。

最期は、呼吸状態の悪化がみられ、病院にて永眠されましたが、K様の意思に寄り添い、穏やかな

看取りをすることができました。

後日、奥様へご挨拶に伺った時、K様が葬儀の段取りをすべて書面で準備されていて、何も困ることはなかったと、話されました。

本当に最期まで、自分の意思を貫き通したK様の生き方に、私たちは、深く感銘を受けました。

この出会いからの学びは、日々の訪問看護の、支えの一つとなっています。

事例を通して感じたこと

自分らしく残された時間を過ごしたい。できることは自分でやりたい。と意思表示していたこと。

自然のまま、ありのままを受け入れていく生き方を、教えられたこと。

残された家族に対して、死後困らない様に、準備をされていたこと。

これらのことから、意思決定の支援、その人らしく生きるための支援は、創造的、柔軟に対応していくことの大切さを学びました。

一人の人生の終い方を見た私達は、今後の自分のこととして、受け止め成長していきます。



マロちゃんマーク (国際医療福祉大学病院のマスコットマーク)

マロちゃん号は、今日もどこかを走っています♥